



KARAJAN IN PARIS

カラヤン・イン・パリ

SIDE 1

- | | |
|---|---------|
| 1. ビゼー：「アルルの女」組曲第2番より "L'ARLESIENNE" SUITE No.2 (Bizet) | |
| a) メヌエット Menuet | (4'14") |
| b) ファランドール Farandole | (3'20") |
| 2. シャブリエ：狂詩曲「スペイン」 ESPAÑA-RHAPSODY (Chabrier) | |
| | (6'03") |

SIDE 2

- | | |
|---|---------|
| 1. グノー：歌劇「ファウスト」よりバレエ音楽 "FAUST" BALLET MUSIC (Gounod) | |
| a) クレオパトラとその奴隷たちの踊り Dance of Cleopatra and her slaves | (1'45") |
| b) トロイの娘の踊り Dance of the Trojan maidens | (2'24") |
| c) 鏡の踊り Mirror dance | (1'56") |
| d) フリネの踊り Dance of Phryne | (2'38") |
| 2. ベルリオーズ：ハンガリア行進曲 HUNGARIAN MARCH (Berlioz) | |
| | (4'15") |

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮 / ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

制作にあたって

毎回御好評をいただいている、DAM 45クラシック・シリーズは、このところ、「サロメ」「ローマの松」「惑星」「アイダ」と、大作が続いておりました。そこで今回は、親しみやすく、楽しい、ポピュラーな小品を、ということで、この秋8度目の来日をするカラヤン〜ベルリン・フィルの来日記念盤として、「カラヤン・イン・パリ」の登場です。

カラヤンといえば、ベーム亡き今、世界の音楽界の頂点に立つ偉大な指揮者ですが、このカラヤンは、ポピュラーな名曲を好んで取り上げる（それも何回も…）という、大指揮者には珍しい特徴があります。

この「カラヤン・イン・パリ」は、昭和55年11月新譜として東芝EMI (EAC-90003)より発売されて間もない話題盤ですが、今回は、その中から、「アルルの女」より2曲、「ファウスト」より3曲を省略して、45回転で両面にカッティングいたしました。

ビゼー、シャブリエ、グノー、ベルリオーズと、フランスの大作曲家の、それもフランス音楽特有の、シャレタ雰囲気を持つ代表的な名曲ばかりを収めています。

この様な小品は、案外、高度な演奏テクニックが要求されるものですが、それは、ベルリン・フィルという、超一流の名人揃いのこととて、素晴らしい名演となっています。

カラヤン〜ベルリン・フィルのゴージャスなサウンドとあいまって、最近のカラヤンの録音の中でも屈指の優秀録音が、DAMの45回転、ハイレベルカット、厚手重量フラットプレスにより、その素晴らしさを余すところなく再現できることと思います。

「アルルの女」のメヌエットでのフルートとハーブの精妙でシンプルな響き、ファランドールのタンバリンとフル・オーケストラのダイナミック・レンジ、狂詩曲「スペイン」でのクリアーで透明な響き、「ファウスト」の豪華絢爛たるオーケストレーション、「ハンガリア行進曲」での金管のファンファーレとグランカッサの重低音、等々、オーディオ・チェックのポイントは数えあげればきりがありませんが、まずは何はともあれ、音楽を心ゆくまでお楽しみください。

DAMといたしましても、更に今後、会員の皆様に満足していただけるソフトの開発に努力いたしますので、よろしく御支援のほどお願い申し上げます。

なお、レコード化にあたり、東芝EMI様をはじめ、御協力をいただいた関係各位に、心からお礼申し上げます。

DAM推進委員会

「カラヤン・イン・パリ」に寄せて

真庭 健 (音楽評論家)

1980年11月新譜として東芝EMIから発売され、絶賛をうけたアルバム。そのなかから演奏時間の都合上、比較的魅力的薄い「アルルの女」中の2曲と「ファウスト」中の3曲を抜き、音質を高めるべく45回転でカットしなおした、とびきり贅沢なレコードなのだ。題して「カラヤン・イン・パリ」。

最初、このレコードが市販されたとき、アルバム・タイトルを見て「お、カラヤン、ひさしぶりにまたパリ管（パリ管弦楽団）とやったのか!？」と思った。で、よく見るとオーケストラはいつもの手兵ベルリン・フィル、録音場所にしてもパリなんかじゃない、ベルリン・フィルの根城（フィルハーモニー）。フランス音楽を集めた1枚なので「イン・パリ」としゃれてみたわけですね。そういえばカラヤン、けしてフランス音楽と縁浅くない。このレコードに取められたどの曲についても2度目3度目の録音となるし、これ以外でもオッフェンバック、ドビュッシー、ラヴェルと、幅広いレパートリーを持ち、フランス人の演奏によるフランス物とはまた一風違った骨太の名演を聴かせてくれる。

ヘルベルト・フォン・カラヤン。1908年4月、外科医の息子としてザルツブルクに生まれる。はじめピアノを学び、後にフランス・シャルク、パウムガルトナーのもとで指揮法の指導を受ける。1928年ウルム歌劇場で指揮のデビュー。1934年からアーヘン歌劇場音楽監督、1938年からベルリン国立歌劇場常任指揮者となる。当時ドイツ音楽界の「帝王」はフルトヴェングラーだったが、1938年1月ベルリンにデビューしたカラヤンは「現代音楽界の生んだ奇蹟」と評され、フルトヴェングラーと人気を二分するほどだったという。1941年、ドイツ占領下のパリに登場、ドイツ大使館の肝入りもあって、パリ中の注目を集めた。

戦後1947年にはウィーン・フィルを指揮、1949年ミラノ・スカラ座常任指揮者、1950年フィルハーモニア管指揮者と、活躍の場を拡げる。1955年には、世を去ったフルトヴェングラーのあとをうけてベルリン・フィルハーモニーの常任指揮者となり、今日までそのポストにある。その間、ウィーン国立歌劇場、ザルツブルク音楽祭、パリ管弦楽団等の指揮者を兼任し、今日に至るまでその活躍は衰えを知らないかのようだ。

こうして経歴をまとめてみれば、オーストリアに生まれたカラヤンだけれど、その活躍の場はあくまでドイツ、それもベルリンを強固な足場としてきたことがわかる。その音楽もウィンナ・ワルツに代表されるようなドイツ文化の辺境（つまり片田舎ですね）としてのオーストリアとは無縁の、近代的な精神美によって構築されており、これはもう「ドイツの指揮者」といっていいだろう。

そのカラヤンとドイツが世界に誇るオーケストラが、フランス音楽をとりあげる。いったいどんな気持ちなのだろうと、つい考えてしまうのです。

フランスとドイツ。ライン川をはさんで隣りあったこのふたつの国は、なにかにつけてひきあいに出されるほど、実に鮮やかな対称をみせている。「粋・軽さ」と「堅実・剛健」といったコントラスト。これ、偏見でも誤解でもなく子細にみても、やっぱりある。フランスとくれば服飾から香水に至るまでのファッション、ドイツといえは精密機器に代表される工業製品といった具合。ドイツ人デザイナーのアティックなんて想像もつかないし、また逆にフランス製高級一眼レフとくれば信頼性ないことおびただしいカンジ。（フランス製工業製品で世

界に冠るといったら、Bicのボールペンとライターくらいじゃないかしら？）

こうまで国民性が違えば、ウマが合うわけがない、と思ってしまう。小学校の時、《最後の授業》という小説、授業でやりました。《アルルの女》の原作者でもあるアルフォンス・ドーデの作。戦争に敗れ、アルザス・ロレーヌ地方（一番ドイツの国境に近いのです）がドイツの領地になる。フランス語の使用を禁じられ、先生は黙って黒板に「フランス万歳！」と書き、授業を終える、あれです。なんとなくワタクシこの話を《第2次大戦》時のことと想像していましたが、ドーデ（1840-1897）の小説ですから全然時代が違う。プロシア（ドイツ）とフランスが戦った普仏戦争（1870）での物語でした。自己弁護めきますがそう思い込んだのも無理からぬハナシ、その後第1次大戦ではフランスが取りかえし、第2次大戦ではドイツが全土を制圧し、連合軍による《開放》で手をひくという風に、つまりドイツとフランス、とったりとりかえしたりの歴史だったわけですね。

こうした歴史やお国柄を考え併せれば、このふたつの国は犬猿の仲？と思いますが、どうも違う。たしかにドイツ人にいわせればフランス人のデタラメぶりや軟弱さはつきあいきれないし、フランス人はドイツ人の鈍重さや律儀ぶりを鼻でせせら笑う。でもそのジツ、夏の休みなどというフランスの家族はシトロエンに乗ってドイツ旅行、オヤジさんは前から欲しかったツァイスの交換レンズ買ったり、ドイツ人の家族はワーゲンに乗ってパリ見物、奥さんはパーティ用ドレスをジヴァンシーの店であつらえたり——という具合。このレコードのカラヤンにしても、ミュンシュの死で空席になったパリ管の指揮をひきうけたり、手兵ベルリン・フィルを使ってフランス物を入れたり。つまりね、フランスはドイツを、ドイツはフランスを、本心から嫌ってるかというどうもそうではないみたい。むしろ逆に、自分にはないものをアッチは持っていると、それに対する憧れ（と口に出すのは恥かしい尊敬にも似た羨望）を、お互い相当に持ってるんじゃないか、と思えるのだ。「隣の芝生がよく（素敵に、の意）みえる」という諺があります。芝生なんてそうそうお目にかかれるものではなく、ぼくらにとっては非現実的だから、「隣の人妻がよくみえる」と変えてみれば、ぐっと現実的。どうもドイツとフランス、そうした一種のコンプレックスで見あっているみたいなのだ。

ちょうど「いーなあ、アレ」ってカンジ。そんな「隣りの人妻」に手を出したのが、カラヤンのこのレコード。オハコのドイツ物とは一味違って、新鮮な興奮がなんとも刺激的なアルバムになっています。

演奏しているベルリン・フィルハーモニー管弦楽団は1882年の創立。フォン・ビューロー、ニキシュ、フルトヴェングラーといった錚々たる歴代常任指揮者のあとをうけてカラヤンをむかえ、今年で26年目。カラヤンの銘器として名実ともに現代世界最高のオーケストラといえる。各パートの技術的レヴェルの高さもさることながら、それらがマスとなった時に発揮する合奏能力の比類無さは、他にちょっと較べようのないほどだ。寸分の狂いもなく機能する快感は、フランスのオケからは聴けない魅力を、このレコードで生み出している。

《第1面》

ビゼー(1838-1875)

劇付随音楽「アルルの女」——メヌエット、ファランドール

さきにも触れたドーデ作の戯曲のために書かれたビゼー晩年（1872）の作品。ゴッホの名とともに知られているアルルは、地中海に近い南仏プロヴァンスの町だ。田舎の悲しい恋物語にビゼーは27曲の音楽をつけた。後に作曲者が4曲からなる組曲を編み好評だったため、さらに友人であるエルネスト・ギローが他の4曲で《第2組曲》を編む。その後半2曲がここで大きくメヌエットとファランドール。

メヌエット 実とは無関係の、オペラ《美しきベルットの娘》中の1曲。ギローが見つけ出し、組曲に加えた。ハーブの伴奏によってフルートの旋律が美しい。

ファランドール クリスマスにちなむ民謡《3人の王の行進》と、プロヴァンス太鼓に乗ったファランドール（民俗舞曲の一種）が交互にくり返されて、熱狂的な高まりをつくっていく。

シャブリエ(1841-1894)

狂詩曲「スペイン」

フランスの一方の隣国スペインは、あいだにピレネー山脈が立ちだかっていることもあって、「ピレネーのむこうはアフリカさ」といわれるほどに近くて遠い国だった。それだけに余計、多くの芸術家がスペインに寄せて見果てぬ夢を紡いでいる。

シャブリエは39歳まで内務省の役人を勤めた変り種。1882年、妻と憧れのスペインに旅し、翌年この曲を発表している。明るい色彩と強烈なリズムで、輝くばかりの作品。

《第2面》

グノー(1818-1893)

歌劇「ファウスト」——バレエ音楽

フランス・オペラに大きな足跡を残したグノーの代表作(1859)。ゲーテの原作による。バレエ好みのパリの聴衆を意識して、ワーグナーをはじめ多くの作曲家が自作のオペラの中にバレエ場面を追加しているが、これもその1つで、1869年に書き加えられた。

悪魔メフィストフェレスに魂を売ったファウストは、ハルツ山地にあるブロッケン山に連れて来られる。その寂しい山中がにわかに豪華な大宮殿と化し、古代の美女達が現われ、幻想的で優美な、かつ魅惑的な踊りが次々と繰り広げられる。切れ目なしに7つの音楽が演奏されるが、ここに収録されているのは、a)「クレオパトラとその奴隷たちの踊り」なめらかな金管に舞うようなヴァイオリンの明るい旋律。b)「トロイの娘の踊り」ハーブのバックと弦のコンビネーションが、美女ヘレンの魅惑的な旋律をかなでる。c)「鏡の踊り」軽快なメロディーが木管と弦楽器でリズムに踊る。d)「フリネの踊り」激しくダイナミックな部分とハーブの優雅な旋律、最後のクライマックスの大合奏、フリネの魅力を充分に引き立たせたバレエ音楽のエンディングにふさわしい。以上4曲。

ベルリオーズ(1803-1869)

劇物語「ファウストの劫罰」——ハンガリア行進曲

ベルリオーズを、19世紀前半にそびえ立つ《ロマンティックな怪物》と言ったらよいだろうか。その生活、作品、思想、いずれをとっても同時代の他の作曲家を大きく凌駕している。

曲は前曲「ファウスト」と同様、ゲーテにインスパイアされて作られたもの(1846)。ハンガリー軍の行進を描いており、ハンガリーの貴族の名をとって「ラコッツィ行進曲」とも呼ばれる。

オーディオ・システムの基本的なチェック・ポイントは、周波数特性である。そこで、このレコードに収録されている8曲の各曲ごとの周波数エネルギー分布をスペクトラム・アナライザーで測定し、写真に撮ってお目にかけることにした。それぞれの曲全体をピーク・ホールドで測定したもので、各曲に含まれる周波数ごとの最大エネルギーを表わしたものである。写真の横方向の目盛は周波数で、左端の25Hzから右端の20KHzまで1/2オクターブごとの30の周波数、縦方向の目盛は各周波ごとのエネルギーのレベルを表わし、横線は最も上の線を0dBにして-10dB、-20dBと10dB間隔になっている。ご参考にすれば幸である。

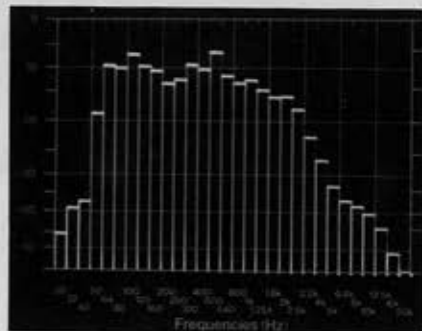
■SIDE-1

1. ビゼー：「アルルの女」組曲第2番より

a. メヌエット

ハーブの伴奏によってフルートのソロが歌う甘美なメロディ。曲の前半と後半で2回奏されるフルートのメロディは一度聴いたら決して耳から離れることはない印象的なものだ。写真に見られるエネルギー分布は中間部の全強奏で盛り上がったもので、ハーブとフルート・ソロの部分では最大レベルが写真より15dBほど低く、160Hz付近から1.6KHzあたりまでの狭い周波数帯域にエネルギーが集中している。

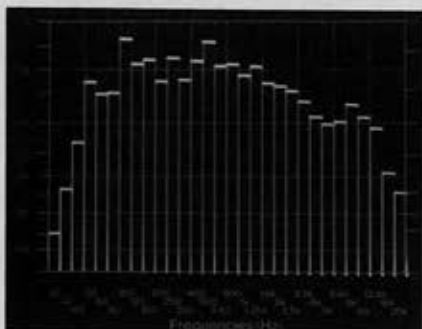
この曲ではそのフルートの音色が最大のチェック・ポイントだ。フルートの音色が限りなく澄明に、つややかに、やわらかく、かつ音像定位に奥行きを感じさせて聴えなければならぬ。



メヌエット

b. ファランドール

全合奏の最強奏で始まる壮麗な曲である。したがって、広い周波数帯域にエネルギーが厚く分布している。写真を見て気付くことは、8KHzを中心に高域にエネルギーが厚いこと、50Hzの低域のレベルが高いことだ。8KHzの山は37秒ころからのアレグロ・ヴィーヴォ・エ・デチーソに最弱奏で登場し、次第に音量を増していくタンプリンで表われたもので、50Hzの盛り上がりは終曲に近いクライマックスの中で2分49秒ころから奏されるグランカッサでできたものである。中央近くの奥に定位するタンプリンの繊細な粒立ちをどう再生するか、同様に中央の奥に自然な距離感をおいて定位するグランカッサの量感や力感をどう表現するかが最大のチェック・ポイントになり、全強奏と重なるタンプリンなどの高音楽器が歪まないか、左右方向と奥行きも方向に広がって定位する各楽器を解像して再生するかも聴きどころである。

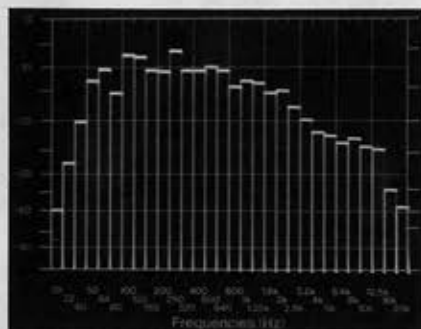


ファランドール

2. シャブリエ：狂詩曲「スペイン」

いかに絢爛たる華麗な曲であるかは、エネルギーが広い周波数帯域に分布していることを表わしている写真を見ただけでおわかりだろう。写真のように、中音域から低音域にエネルギーが厚い安定感のあるバランスで再生され、それに重なる高音楽器の澄明な色彩が不自然に華やかになったり、混濁して聴えてはならず、この

曲でも使われるグランカッサの衝撃音の力感も重要なチェック・ポイントだ。全強奏ではフィルハーモニー・ホール全体がよく鳴り、ホールの空間に広がる響きのスケール感も大きく再生されなければならない。



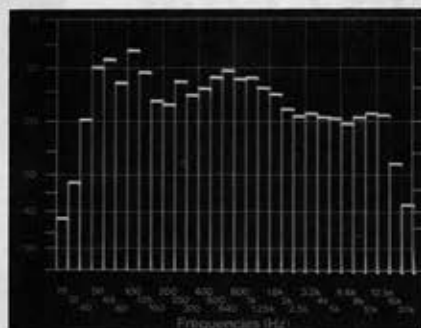
狂詩曲「スペイン」

■SIDE-2

1. グノー：歌劇「ファウスト」よりバレエ音楽

a. クレオパトラとその奴隷たちの踊り

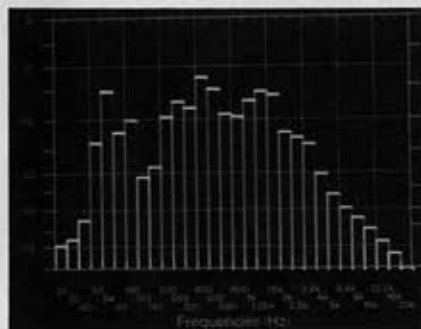
2分にも満たない短い曲だが、多量のエネルギーが低域から高域まで広い周波数帯域に分布している曲である。10KHzを中心に12.5KHzまで達する高域の山は、50Hzの盛り上がりを作るグランカッサとともに奏されるシンバルによるものだ。シンバルは高域周波数特性や高域の過渡特性をチェックするのに格好の楽器である。とくに、低音楽器と重なって奏される場合に音色がにごって聴えてはならない。それにしても、低域の量感の豊かなバランス、低音楽器の芯の力強いところがオーディオの醍醐味を堪能させてくれる素晴らしい録音である。低音は音楽を支える土台であり、低音の乏しい音楽ほど空しいものはないのである。



クレオパトラとその奴隷たちの踊り

b. トロイの娘の踊り

写真の周波数エネルギー分布は不思議な形をしているが、64Hzを中心とする山は低弦などによるもので、ハーブを伴奏にした高弦群などの官能的なメロディはそれより高い周波数に山を盛り上げる。この曲では何んといっても、高弦群のみずみずしい、澄明な音色



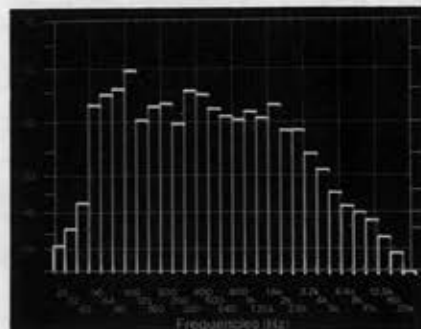
トロイの娘の踊り

をどう再生するかがチェック・ポイントだ。

c. 鏡の踊り

この2分弱の短い曲で主に活躍するのは高弦群と木管楽器。

高弦群の肌ざわりのしっとりした音色や、木管楽器のつやばい音色が十分に美しく再生されるかが聴きどころで、それらの解像度はもちろん、ハーモニーの溶け合いも明確に再現されなければならない。

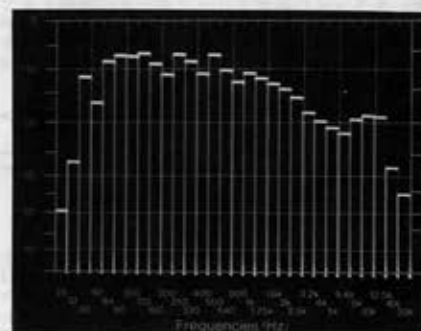


鏡の踊り

d. フリネの踊り

バレエ音楽の終曲にふさわしいエネルギーで、華麗な曲である。低域の豊かなバランス、低音楽器の力感、ホールの空間に充満する響きの大きなスケール感、各パートの分解能や奥行き感、多彩な楽器の音色の澄明感や質感、ハーモニーの溶け合い、など総合的なチェックに格好な曲である。

1回ごとにチェック・ポイントを一点に絞って何回も聴くようにするのが効果的、かつ確実なチェック法である。

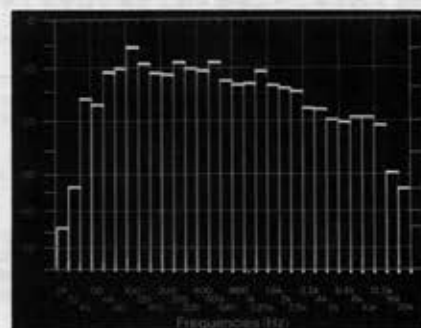


フリネの踊り

2. ベルリオーズ：ハンガリア行進曲

冒頭で奏される金管楽器の響きの自然、かつ大きな広がりからもわかるように、ベルリン・フィルの本拠フィルハーモニー・ホールの響きの素晴らしさと、録音技術の確かさに圧倒されるみごとな録音だ。ホールも楽器であることを実感することができるだろう。その

ホール・レゾナンスを明確に、自然に再生するにはシステム全体がかなり高度で、しかも完全に使いこなされていなければならない。最もデリケートで、最も難しく、しかも最も重要なチェック・ポイントである。



ハンガリア行進曲

以上の内容は東芝EMIで発売しているEAC-90003での測定のもので、DAM45回転LP(DOR-0101)での周波数特性を各人が調べてみることをおすすめします。

■DAMハイクオリティ・レコードについて

最近のデジタル・オーディオ技術とその周辺技術の急速な進歩でハード、ソフト共に著しく多様化しており、PCMテープ、デジタル・オーディオ・ディスク及びビデオ・ディスク等による新しい記録媒体の開発と実用化に伴い、多種多様なソフトテクニックと音楽へのアプローチの仕方が一段とエスカレートして来ております。同様にいかにより高い音楽性とオリジナル演奏の忠実なトータル・サウンドを完成させるか、ソフト技術以上に製盤技術の開発もここに来て厳しく、高密度、高品質化の一途を辿っています。その中で特にビデオ・ディスク及びデジタル・オーディオ・ディスクの開発技術によって得られた製盤の周辺技術とノウハウを最大限に駆使し、従来のマスタリングの仕様とは性格の異なる、手作りのプロセスを経て製作されたものが今回のDAMレコードであります。

オーディオ・マニア諸氏はもちろんのこと、音楽ファンの皆様も年2回企画されているDAMレコードについては、常に新しい試みがなされ、前向きな姿勢で技術的テクニックとそのトーン・キャラクターを追求し、より忠実な音楽の再現を制作ポリシーとしている意図を理解していただいていることと思っております。

そこで今回のハイクオリティ・レコードの特徴を述べてみます。

レコード(フラット・ディスク)形状

一般レコード形状は、音溝部を保護する為にレーベル部とレコード周縁部にグループガードをほどこして、音溝部が直接に接触しない様に厚くなってあります。これが一方では、レコード再生条件や音質への影響を考慮した場合必ずしも望ましい形状では無いようです。

例えばa)グループガードの傾斜している溝部に再生針先が正規な溝壁面接触しないままトレスする為に、異状音の発生やノイズの発生原因となります。b)ピックアップを下す時へたをすると、針先が滑って音溝部までジャンプする事もありキズの原因となります。c)ピックアップによっては、カートリッジの底がグループガードに接触することもあります。d)音質への影響としては、断面形状から解るように、ターンテーブル・シートと音溝部の密着性が悪くなり、レコード固有共振を起こしやすい状態にあると云えます。

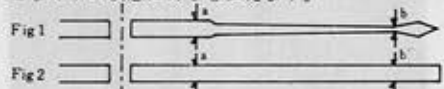


Fig 1 一般のレコード a-b=0.6(mm)

Fig 2 新フラットレコード(ディスク)

a'-b'=0.2(mm)

御存知のようにステレオ音溝は、水平振幅は左右信号の和(L+R)、上下振幅は左右信号の差(L-R)として録音カッティングされており、特に本レコードのように通常のレコードより+5dB程もハイレベルでカッティングされた複雑な音溝の再生は、より以上のカートリッジの振動エネルギーでレコード盤を烈振させ、レコードの固有共振によって音質への影響が充分に考えられます。

共振はマスとコンプライアンスの積で表わされますから、レコードの固有共振はレコードを厚く重くすることでマス成分を増して共振を下げ、更にレコード平面均一性の精度を上げ、フラット面に形状変更することでターンテーブル・マットとの密着性を大幅に改善し、共振によるレコードとターンテーブル・マットとの間に起こるリアクションを緩和させる事を可能にしました。これにより今までに無いサウンド・キャラクターが得られ、特に中域から低域の分解能を一段とクリアーにして、そのナチュラルな響きはよりオリジナル・サウンドに近いものと確信しております。

ターンテーブル及びターンテーブル・マットの材質、形状によっても音質の変化があるように、レコード形状、質量によっても音質へ影響するファクターは充分考えられますが、今回のこのレコードは特に再生条件を考慮した上で新フラットプロフィールを採用致しました。

一般レコードとの比較

| | |
|-----|------------------------|
| 重量比 | 30%up |
| 厚さ比 | 最厚部 15%up 最薄部 65%up |

更に偏心の要因の1つであるセンターホールとプレーヤーのセンターピンとのガタについて注目し、先ず市販プレーヤーのセンターピン寸法を調査してその結果でレコードのセンターホールの設計変更を行い、最小限にガタツキを減らす為にセンターホールの径を小さい方向に持って行きました。

■クォーツ・ロック、厚手レコードについて

従来のシンクロナス・ダイレクト・モーターによる大振幅のカッティングでは、動的ワウ・フラッター(ダイナミック・ワウ)が少なからず音質に影響を及ぼしますが、今回の「DAM45」では、

高精度にサーボされたクォーツ・ロックD.D.モーターとダイヤモンド・カッター針を採用することで、ディスク・マスタリング時に於けるクオリティを高め、以前にまして余裕のある音溝中と大振幅にたえられ、たっぷりとしたピッチとディプスがコントロールされるようになりました。

現在のレコードは再生系機能のグレード・アップに伴い、一段とDレンジ、Fレンジ、及びリニアリティ等、大幅に飛躍しています。振幅(P-P)250μm~280μm、(L-R)、ピーク・レベル+20dB程度のもは数多く高密度レコード化しております。このような高密度レコードの溝波形を完全にトレースする為に再生時の技術的ノウハウ、及びそのテクニックがいろいろ考えられ、かずかずのオーディオ誌上でも論じられています。ヘッド・シェル、トーン・アームやターンテーブル・シートとの共振問題等々……。たとえば、ターンテーブル・シートを例にとっても、ゴム、なめし皮、ガラス、金属等、変える毎にその音質の変化は確実に差があります。このように再生時の高忠実トレースはさまざまな問題が残されています。

それでは、ディスクそのものはどうかと考えると、一時期、薄いレコードはプレスでの塩ビ成形性が良いとされ話題になりましたが、レコードを厚くする(質量を増す)ことでレコードの共振を下げ、更に再生時のレコードとターンテーブル・シートとの間に起る共振を緩和させることで、中音低域の分解能が一段とクリアーになり、特に深みの有る、伸びた重低音の再現とバランスされたダイナミックなパワー感を充分にお楽しみ下さい。

この種のレコードは、特に安定度の高い盤質が必要とされますが、従来からのプロフェッショナル・レコードで開発した材料をベースに、新タイプの配合剤、熱安定性効果の高い安定剤の組合せにより、一層ゲル化性の改善を図り、また更に新タイプ帯電防止剤による静電除去効果ともあいまって極めて安定度の高い、この厚手レコードが生まれ、リアリティのよいダイナミック・レンジをもつオリジナル・サウンドの再現を可能にしました。

30センチ45回転レコードの取扱いについて

このレコードは、通常の33回転レコードと変わった点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

- (1)オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用出来ますが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱い下さい。
- (2)回転が早くなるために、レコードの反りの影響が33回転にくらべて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意して下さい。
- (3)再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますのであらかじめ室温を15℃~20℃位に保って下さい。
- (4)このレコードは、ハイレベルでカッティングされている為、トレーシング時には針トビ、ヒリツキ、等でレコードを傷つけやすい切削状となっています。

再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の摩耗状態、針圧(メーカー指定の重い方にセット)には充分気を付けて下さい。

レコード材質—プロユース材料使用

■Recording Date:29 & 31 Dec.1978, Jun.1979

Musikvereinssaal Vienna

Producer:Michel Glotz

Balance Engineer:Wolfgang Gülich

■Cutting Date:27 Sept. 1981

Toshiba-EMI Gotemba

Balance Engineer:S. Hara

Cutting Engineer:K.YAMAGISHI

Tape Recorder:Studer A-80

Drive Amplifier:Neumann SAL-74

Cutting Lathe:Neumann VMS-70

Quartz Rock Motor

Cutting Head:Neumann SX-74

Non Limiter

Non Equalizer

企画：第一家庭電器株式会社
製造：東芝EMI株式会社

